探訪記

百済の都 扶余をたずねて

―半島と我が国とのかかわり会い―

会員 古藤田 太

先般、弥生町文化財調査委員の個人的な研修旅行として、五十川千代見・小野英治の両氏と私と、百済・新羅の故地を尋ねることにして、六月九日関釜フェリーで出発した。

まず釜山港で入国査証と検疫をすませて、韓国上陸第一歩を踏み出す。韓国経済の飛躍的発展を物語る大型貨物船が、釜山港にひしめいていた。私共は、軍政下の規律と、大型貨物船群の威圧を感じながら、小雨の中を釜山駅に向ったが、乗りこんだバスが、三か所も雨もりしているのに驚いた。晴れ釜山駅は何かと不行届ではあるが、思ったより清潔であった。

優等列車と呼ぶ韓国自慢の列車で、十一時太田に向った。この列車は、内部はピカピカであるのに、不思議と雨もりしていた。私は大型貨物船と、雨もりバスの対照は、今日の韓国発展のあり方を示すものと思われてならなかった。列車内には、哀調を帯びた韓国の歌がたえず流されて、車窓の雨を透して、どこまでも続くポプラ並木が映っていた。

樹木の育たないなだらかな山には、至ところに土饅頭の庶民の墓があるのが目についた。

大邱府の異常なまでの発展に驚きつつ、かつて日本人の経営であったであろう、打ち続く林檎さ右左に、一九五三年朝鮮戦争に爆破された、倭館の鉄橋を渡ると、鉄橋がいま一つ架けられていたのを見た。

永遠の雨に濁流となった洛東江と別れた頃から、天気は快晴と変わり、太田に着いたのは午後二時すぎで、記憶の通りの街並みのようであった。

ここからおんぼろのバスで、百済の都扶余に急いだ。麦が黄色く熟れてる側で、赤牛が活躍する田植風景は、もう日本では珍しくなったが、黄と緑のコントラストはなかなか良いものである。耕運機は滅多に見られない。

バスが扶余の街に着くと、一斉に飛び出してきた物売り女をかきわけて、国立博物館扶余分館に入って行く。広い外庭に、石仏・石塔がずらりと並んでいる。完全なものは少ないようである。今日説明して下さる先生は、李多湖氏で、日本各地で講演をされた由で、司馬遼太郎先生と親交があるとのことであった。

最近ここに移されてきたものに「劉仁願碑」があったが、巨大なものである。文字は大部分読みとれない程、千年の風雪にけずられて、磨耗甚だしいが、これが唐と新羅の連合軍が、百済と日本からの援軍を撃破した勝利の碑で、日本と百済にとっては、屈辱の碑でもある。

李先生の説明によると、唐・羅（新羅）軍戦捷の記念碑建立の命令を受けた百済の石工達は、非常に多い硬質の花崗岩を殊更避けて、磨耗の早いこの石を使い、屈辱の碑面の連かに消え去ることを願ったものであろうという。

博物館内には尚特の文化を物語る、夥しい発掘物が展示されている。瓦一枚を見ても、日本の古寺で何時か見

たような瓦である。先生は飛鳥の瓦と同一のものだと説明される。高杯がある。王宮に使い、また敷いた独得の紋様の塼がある。古い酒壺や饗杯がある。我が国の酒は、百済人須々許里が、飯を噛んで醗酵させてつくった、原始的造酒法を伝えてくれたものといわれるが、この壺こそ、その須々許里の酒壺を前にしている心持がする。日本書紀の記事と同文の記事を誌めた「砂宅智積」の石が、ここに展示されている。半分だけのもので、半分は長い歳月の間に砧（きぬた）にされたものであろう。どうして百済に日本書紀の一文が残ったのであろうか。

百済史の研究を続けられている李先生は、百済の王冠と梵鐘を探しつづけていたが、一九七四年、金製の王及び王妃の冠飾が、武寧王陵から発見されたが、梵鐘だけは未だに発見されない。これは、古来梵鐘が戦利品として最も価値あるものとして珍重されるために、国外に持出されてしまったものであろう。百済の鐘は低く吊り、下を撞って響をいけ、一度下った音が再び鐘の内部を伝い、外に突出したパイプを出てゆくように造られている。余韻が何時までも残るためである。

金堂（時代の降るにつれて講堂）の前に据えられて、燈火を絶やさない「石燈火舎石」なる、八面の石造物を見ると、細かな心遣いの細工が施こされているのに驚く。庭に建てられた朱塗りの八角楼に置かれた大石槽も、見事なものであった。

博物館を出て、宮南池に向かうことにする。バスは仏教伝来謝恩碑の前を通る。その昔、百済の仏教文化は海を越えて日本に渡った。日本の仏教徒によって建てられた、謝恩の碑である。百済に仏教が入ったのは三八四年、中国南朝の東晋からで、漢山に寺を建て、僧十名を住ませたのが始まりであると聞く。

離宮の趾を通る。今は草深い畑である。この辺りは、日本の飛鳥地方の風景とよく似ていると、李先生は熱心に説明される。

今バスは、千古の昔から流れる白馬江を渡ろうとしている。

新羅の武烈王（金春秋）は、唐の力をかりて百済と高句麗を滅ぼして、半島を統一しようとする野望があり、かねてから唐に働きかけていた。

紀元六六〇年、唐は蘇定方を大総官、武烈王の子金仁問を副総官として、水陸十三万の兵力で百済を攻撃することとなった。唐・羅の大軍を背後からうけて百済は敗れ、義慈王は捕えられて百済は亡んだ。

しかし完全に滅んだのではなく、抵抗はこれからであった。百済の遺民は至るところで蜂起して、唐・羅の軍に反抗した。その中でもっとも有力な反抗軍は、鬼室福信の軍であった。

斉明天皇六年（六六〇年）十月、福信の使者が日本の朝廷に、当時日本に来ていた百済の王子豊璋を、百済に返すこと、唐人の捕虜百余人を献じ、日本の応援を乞いたいと願った。豊璋を王として、百済を再興しようというのである。

日本の朝廷は、危険きわまる局面に立たされた。百済を援けると、新羅と戦うだけでなく、それは強大な唐を敵に回すことにほかならない。大和朝廷は、百済を見捨てるならば、多年日本の勢力下にあった半島を、すべて失うことになる。また百済が滅べば、危険は日本に及ぶであろう。ついに廟議は百済の救援に決着して、斉明天皇七年（六六一年）正月、六十八歳のご高齢の斉明天皇は、中大兄皇子（後の天智帝）・大海人（後の天武帝）の両皇子を伴なっ

て、軍船で難波からご出発、三月筑紫の那の大津（博多）に到着した。しかし斉明天皇は七月に急逝されて、遠征軍の指揮は中大兄皇子が執られた。

第一回の援軍は五千余名で、百済の王子豊璋を護って出港した。天智天然二年（六六三年）二月、日本からの救援第二軍は二万七千名で、百済救援軍は都合三万二千余名となり、国運をかけての大出兵であった。

このころ、日本の救援軍に対抗して、唐軍も孫仁師が率いた援軍七千命が到着した。この重要な時期に、重大な事件が突発した。豊璋が鬼室福信を殺してしまったのである。このことは、百済側にとっては暗いかげりを投げるものであった。

七月になると、孫仁師・劉仁願と新羅王とが陸兵を率い、劉仁軌は水軍を率い、熊津江を下って白馬江（白村江）に出て、水陸ならんで豊璋の周留城に迫った。日本の蘆原君に統率された一万余の別働隊（第二軍の一部）は、南部で新羅軍と戦っていたが、戦機熟すと聞いて、白馬江に向った。

豊璋は、蘆原君の到着をまって、唐・羅軍に決戦をいどむことにしていたが、日本軍の来るより早く、唐・羅軍は周留城を囲み、水軍百七十艘が城下で戦列を敷いて待ち構えていた。

蘆原君の到着は八月二十七日、日本でいう「白村江の戦」が開始されたが、戦況利あらず、白馬江は、ために、日本兵士の血で赤く染まったといわれる。

陸戦もまた敗れた。百済最期の日である。階伯将軍は妻子の首を刎ね、一

「百済を愛する者は我に続け」

と叫んで、敵軍に駆け入った。進んで続く者五千を数えたと伝えられ、最近その勇ましい階伯将軍の銅像が建てられている。

かくして百済は亡び、豊璋は高句麗に逃れ去った。人口十五万の泗沘（扶余）の街も、唐・羅兵の蹂躙のもとに亡んだ。建国以来実に三十一王、六百七十八年の久しきにわたった百済であった。

日本軍は南鮮に退き、他の地方で転戦中の日本軍を収容し、亡命を希望する百済人を伴なって、日本に帰還したのであった。

この日本軍の敗戦、百済の滅亡によって、唐・羅軍の進攻におびえた朝廷は、壱岐・対馬及び筑紫に防人さき、大宰府の前面に水城を築いた。さらに、天智天皇四年（六六五年）八月には大宰府の北方に、朝鮮式山城大野城を築き、また現在の佐賀県基山に基肄城を築いた。そして同じく七年（六六八年）には、対馬城山に城山城、讃岐に屋島城、難波にも来寇を予想して、河内・大和の境に高安城を築いて備えたのである。

百済救援軍の派遣は、日本にとってはかり知れない犠牲となった。戦後はさらに農民に強いる過重な負担と、防備の強化となってあらわれた。日本が動揺し、後年の元寇にも劣らない大きなものであったにちがいない。

今私共は、悠々たる白馬の流れを望むと、かつてこの川の、この辺りで、日本の国運を賭けての一大決戦が行われたとは、到底思われない程静かな流れであった。しかし、往古より日本と百済は、とくに堅いきずなで結ばれていたことを想起して、千三百年を経た今日、尚切々たる感慨を覚える。

あの辺りであろうか。かって高願寺があった。仏教修道の若い女性達が、岩肌に湧く清水を汲みに来て、薬水といわれるこの清水を証明するために、ここにしかない

コウランソウ（高蘭草）の葉を浮かべて持ち帰ったと伝えられている。

その高蘭寺の近くに、百花亭がある。唐・羅の大軍の前に、百済三千の宮女達が操を守るために、ここの岩場から白馬江に身を投じたという。昔は「百死岩」と呼んだが、あまりに風情が無さすぎるということから、「落花岩」と改められた。

バスは宮南池に到着した。宮南池は、現在でも広い池であるが、往時は十倍の面積をもっていた。百済武王の時、二里の彼方から水をひき入れて池とし、戦時には濠とするつもりで造られたのである。そして歌舞の宮女達を乗せた龍頭船が、昼夜の別なく浮かんでいたという。

この近くに、百済が残した唯一の石塔がある。

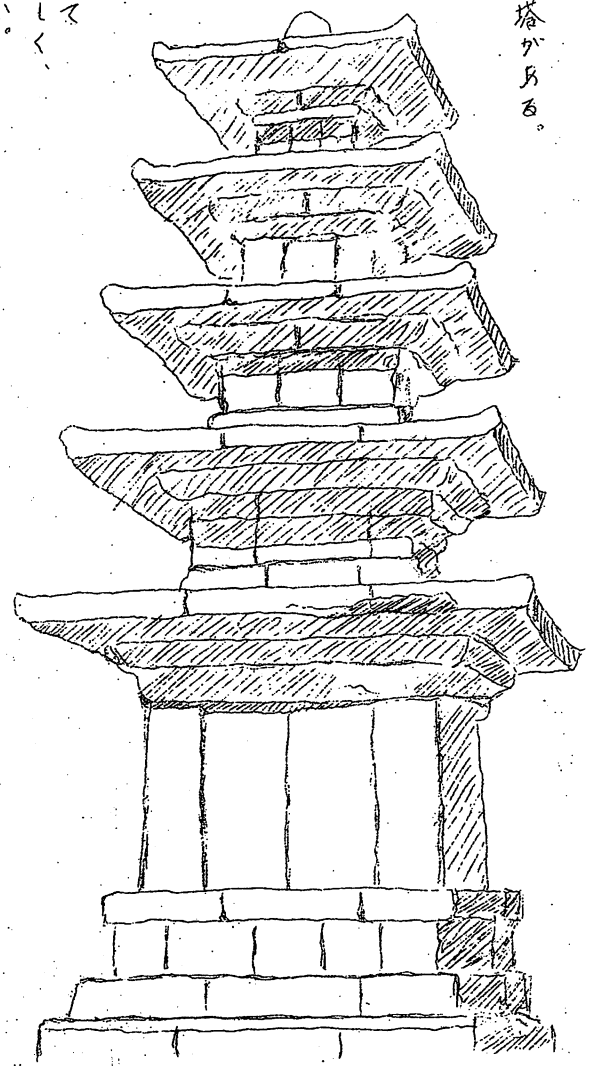
人は、誤って「平済塔」と呼ぶ。

唐・羅の軍が百済を滅ぼした記念塔の意味であろうが、「この碑は蘇定方以前のもので、蘇定方が既に建っていた塔に、名を刻んだものにすぎない。」と説明された。美しい均整のとれたこの塔を、李先生は、

「平済塔と呼びないで欲しい。百済塔と呼んで下さい。」

と、あたかも哀願するように繰返していわれた。私達は深い感銘をもってこの塔を仰いだが、私はこのように美しく、気品に満ちた石塔を他に見たことがない。

私はこれから「百済塔」と呼びたい。正しくは「定林寺址五層石塔」で、韓国国宝第九号に指定されているものである。



（図は、百済石塔の模写、不出来ですが…！　羽柴画）

泗沘の街には、当時軍倉があった。蘇定方の兵燹（兵火）によって焼かれたが、兵糧であった米・麦・豆・粟が真黒く炭化して、今日もなお出土して止まない。瓦も出土する。悲しい歴史を物語るものであろう。

ここを訪れた誰かの歌がある。

旅人よ心して踏めいにしへの
百済の瓦土にまじれり

「新羅は眼で見よ。百済は心で眺めよ」といわれる。私どもは百済の都に名残りを惜しみながら、夕陽を浴びて再びバスの人となり、新羅の都慶州に向った。（終）